

加藤周一文庫における「音楽」関連史資料について
付一加藤周一宛別宮貞雄書簡

The reports on historical document on “music” in The Kato Shuichi Collection:
Including the letter from Sadao Bekku to Shuichi Kato

西澤 忠志
Tadashi Nishizawa

0. はじめに

0.1 加藤周一文庫の概要

2016年の平井嘉一郎図書館開館に合わせて、立命館大学では新たに個人文庫が増設された。その一つが加藤周一文庫である。

加藤周一（1919-2008）は、東京生まれの評論家、小説家である。東京帝国大学医学部卒業。在学中の1942年に中村真一郎、福永武彦と押韻定型詩の運動「マチネ・ポエティック」をおこし、また第二次世界大戦後に中村、福永との共同執筆による時評風の評論集『1946 文学的考察』（1947）を刊行し注目された。続いて自身の戦争体験に基づいた小説『ある晴れた日に』（1949）によって戦後作家の位置を得るとともに、『文学と現実』（1948）などの多彩な評論活動を展開した。1951年（昭和26）フランスに留学するが、その成果として評論集『雑種文化』（1956）では、西欧文化を純粋とすれば日本文化は優れた伝統を基盤としての雑種文化とし、そこに文化創造の新しい可能性を予見するという卓抜した文化論を示した。1960年にカナダのブリティッシュ・コロンビア大学に招かれ、1970年にはベルリン自由大学教授となり、日本との間を往復しながら文筆活動を続けたが、自然科学から人文科学に及ぶ広い視野、豊富な知識と教養、明晰で鋭利な論理によって、『羊の歌』『日本文学史序説』など、多くの小説、評論を発表した¹。

彼の史資料が立命館大学に収められたのは、彼が国際関係学部の客員教授と国際平和ミュージアム初代館長を務めたように、大学との関連が深かったためである²。これらの整理は2011年から行われ、2018年時点の点数は以下の通りである³。

蔵書（図書）17,048冊

蔵書（雑誌）2,036冊（506タイトル）

¹ 古木春哉「加藤周一」『日本大百科全書（ニッポニカ）』（JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>、最終確認2023年3月28日）

² （二宮2016, 頁数なし）

³ （鷲巣2018, 55）

冊子型ノート・手帳 88冊
ファイル約 1,000 ファイル
写真約 2,000 枚（個人写真から資料用写真まで）
書簡約 1,000 通
立体物 55 点（賞杯など）
その他（地図・パンフレット）約 1,800 点⁴

この中には、加藤の主著『日本文学史序説』『日本 その心とかたち』を執筆する際の基礎となった、海外における日本文学史、日本美術史に関する加藤の講義メモ、加藤が執筆の際に参照した図書・論文・地図、彼の社会に対する考えを書き残した日記類が含まれている。これらは、加藤の思想が著作に結実していくまでの過程を見るうえで、重要な史資料となる⁵。

0.2 音楽史研究における加藤周一の可能性

本稿は中でも「音楽」に関する史資料に着目する。その理由は、以下の通りである。

1 つ目は、これまでの「戦後啓蒙の世代⁶」に当たる知識人による「音楽」論に関する研究とは、異なる流れを示すことができるためである。先行研究をもとに、「戦後啓蒙の世代」の知識人による「音楽」論をまとめると、以下の様になる。

まず、「普遍的な文化」として西洋芸術音楽（＝クラシック音楽）を論じた、「教養主義」の流れを受けた旧制高校出身者の「知識人」を対象とする研究である。特に、その代表として取り上げられているのが、政治学者である丸山眞男（1914-1996）である。丸山は東京大学を中心に日本政治学を講じるとともに、書齋や会話といった私的な場で、「音楽」を論じていた。ここでいう「音楽」は、「ドイツ」で作曲・演奏された西洋音楽を指す。その内容は、音楽の大衆への教育効果、音楽の歴史的・社会的条件、西洋音楽の普遍性に関するものだった⁷。こうした丸山に代表される西洋音楽との向き合い方は、クラシック音楽にかかわる生態の「原型」的なあり方として見られている⁸。

⁴ この中には、献呈されたと思われる CD が含まれているが、本稿では省略する。

⁵ 加藤周一の手稿類、日記類は随時、デジタルアーカイブの形で公開されている。

(<https://adeac.jp/ritsumeikan-univ-lib-KatoShuichi/top/>)

⁶ 多くは戦前戦中には自己の学問や文学の世界に沈潜し、戦後一斉に言論活動を開始し、戦後の日本における啓蒙を担った知識人。「大正教養主義」世代の学者による自由主義を継承しつつ、マルクス主義者の学問的業績と講座派と労農派による日本資本主義分析に影響を受け、自身の学問にいかした（松本 2019, 16）。

⁷ （奥波 2015, 18）

⁸ （若林 2005, 221）

次に、同時代の「大衆文化」としての「音楽」を論じた、「教養主義」の伝統から離れていた旧制高校出身者ではない「知識人」を対象とする研究である。特に、粟谷（2018）の場合、鶴見俊輔（1922-2015）の「限界芸術論」とフォークソング文化との関係を取り上げ、戦後日本の知識人と大衆文化、そして文化の担い手となった人々との思想的連関を明らかにしている。

こうした、ヨーロッパ（特にドイツ）の学知に裏付けられた音楽観と「大衆文化」に寄り添う音楽観を提示される中で、雅楽・声明・能楽・黒御簾音楽などの「日本音楽」と「現代音楽」は取りこぼされている。また、特に「実験工房」に代表されるように、「現代音楽」の作曲家は多くの場合、文学や美術などの他ジャンルとの交流を元に創作活動を行っていた。ここから、現在の「戦後知識人」と「音楽」との関係をめぐる先行研究が、当時の他ジャンルにまたがっていた音楽状況とは異なり、あくまで局所的な意味での「音楽」を対象としたものに限られていることが分かる。

加藤周一の場合、旧制高等学校と東京帝国大学を卒業した点は丸山と同様である。しかし、加藤は、シェーンベルクやベルクを論じ、小倉朗（1916-1990）や武満徹（1930-1996）などの同時代の作曲家と親交を持ったように、丸山が距離感をとっていた⁹、いわゆる「現代音楽」を聴き、論じた点において、丸山に代表される旧制高校出身者の「知識人」による西洋音楽への聴き方とは異なるものとなっている。また、丸山眞男『自己内対話』に代表されるように、あくまで西洋芸術音楽は私的領域の中で完結するものとして捉えられているが、加藤の場合は評論という形で西洋音楽と同時代の社会との関わりを論じた点において、丸山よりも鶴見の立場に近い。しかし、加藤は「流行歌」については、ほとんど論じていない。そのため、丸山に代表される立場にも、鶴見に代表される立場にもつかない、独自の立ち位置を有することが、加藤の音楽論から推測される。

2つ目は、加藤周一にとどまらず、加藤周一を「鏡」として、加藤と交友のあった音楽家、延いては同時代の音楽界の思想と動向を示すことができるためである。特にこうした方法は、書簡を対象とした研究を通して提示することができる。ある特定の人物による手紙（書簡）に対する研究方法は、以下のような動向がある。

まず、「エゴ・ドキュメント」の一つとして取り扱う方法である。「一人称」で書かれた資料を示す「エゴ・ドキュメント」は、例外的個人を対象としたそれまでの歴史学研究を批判し、より日常生活に密着し、越境して移動する個人に焦点を当てようとする問題意識

⁹ 丸山眞男の『自己内対話』では、「心から尊敬する曲」の1つとしてベルク《ヴォツェック》を挙げているが、その一方で「本当に美しさがわからない作曲家」として「ドビュッシー、その他メシアンなど大部分の『現代』作曲家」が挙げている（丸山1998, 262-263）。また、東京女子大学丸山眞男文庫には、ベルク《ヴォツェック》のリブレットを除いて、「現代音楽」の楽譜は所蔵されていない（土合2012, 76）。

を反映した動向の一つとして取り上げられている¹⁰。「エゴ・ドキュメント」の対象となる史資料は、日記、旅行記、回想記など多岐にわたり、その中に書簡も含まれている¹¹。「エゴ・ドキュメント」の一つとして書簡に注目した研究には、例えば今井（2018）の場合、ドイツの作家、ボード・ウーゼ（1904-1963）のヴァイマル共和国期のドイツでの活動を、送られた個人的な書簡などの「エゴ・ドキュメント」をもとに、「義勇軍」として反政府クーデターや街頭闘争に参加しつつも、そうした経験が彼の思想と行動に強固な基盤を与えず不安定なままだった、彼の同時代の社会に対する態度を明らかにしている¹²。

そして、発信者とその周辺のネットワークを明らかにするための史料として取り扱う方法である。例えば手塚（2011）の場合、アイヌ研究を行った医師、考古学者、人類学者のニール・ゴードン・マンローによる書簡を「社会ネットワーク分析」の知見をもとに読解することにより、マンローだけでなく彼をとりまく人々とのネットワークを明らかにしている¹³。

こうした書簡に関する研究動向の中で、特定の音楽家の書簡を対象とした研究は日本の音楽家の場合、東京音楽学校の学生による書簡を取り上げた研究¹⁴や、信時潔の書簡集が刊行されている¹⁵。それまでは、刊行されたヨーロッパの音楽家の書簡を対象とした研究が中心となっていたため、日本の音楽家による書簡を対象とした研究は、途上にあると考えられる。本稿はこの点について、加藤と親交のあった作曲家、別宮貞雄（1922-2012）を例に、日本の作曲家を対象とした研究の中で加藤文庫の史資料がどのように活用できるのか、今後の展望を示したい。

本稿の内容は以下の通りである。まず、加藤周一文庫に所蔵されている「音楽」関連史資料の概要を整理する。次に、以上の史資料が日本音楽史研究にどのように資するのかを、別宮貞雄宛書簡を例に提示する。

1 加藤周一文庫所蔵の「音楽」関連史資料の概要

本節では、加藤周一文庫が所蔵する「音楽」に関する史資料を、手稿類・蔵書・書簡に分けて解説する。

¹⁰ （長谷川 2020, 2）

¹¹ （長谷川 2020, 3）

¹² （今井 2018, 94-95）

¹³ （手塚 2011, 59）

¹⁴ 仲辻真帆 2019 「1930年代前半の東京音楽学校における作曲教育——学校資料と初期卒業生の資料にみる本科作曲部の様相」『音楽学』65巻1号: 32-49.

¹⁵ 信時三郎, 信時裕子（編）2021 『益子さんへの手紙——信時潔・ミイ書簡集』大阪：オリンピック印刷

1.1 手稿類

「音楽」に関する加藤周一の草稿類は、大きく二つに分けることができる。

まず、1950年代フランス留学中に『芸術新潮』と『西日本新聞』に掲載した紀行文である。これは、1951年から1955年にかけて加藤がフランスに留学する際に、学費以外の生活費と渡航費を自弁する必要がある「半給費留学生」に選ばれたためである。そのため、加藤はフランス留学に際して、『西日本新聞』と契約を交わし、フランスやイギリスの政治や文化に関する記事を執筆した¹⁶。

加藤文庫には、同時期の加藤が執筆した原稿が数枚残っている。この中には『西日本新聞』だけでなく、共同通信社に送ったと考えられる記事も残されている。現在、確認できている「音楽」に関連する原稿は以下の通りである。

・凡例

執筆年月日 タイトル 送り先

1954年3月11日 「トゥランガリラ・サンフォニー」 共同通信

1954年7月29日 「カヴェント・ガーデンのヴァーグナー——“ニーベルンゲンの指輪”」
共同通信

不明 「薔薇の騎士」 N.N.〔西日本新聞〕

これらの記事が実際に掲載されたかどうかは不明だが、これらの原稿は、加藤の同時代の音楽への関心を広く向けていたこと¹⁷を補強することとなるだろう。

次に、未刊行の講演メモである。加藤は執筆活動とともに、各地で講演を行った。「音楽」の場合も同様である。現時点（2023年3月）で確認できるのは以下の通りである。

・凡例

執筆年月日 演題 講演した場所

1990年2月11日 「世界の中の日本 オーケストラ——その現状と展望」 「シンフォニーオーケストラフォーラム'90」¹⁸

1991年7月17日 〔不明〕 札幌市教育文化会館「作曲家・小倉朗」

2000年11月27日 〔不明〕 「阿部桂子ピアノ・リサイタル」¹⁹

2003年6月29日 「堀辰雄と音楽」 東京世田谷文学館

¹⁶ (鷲巣 2018, 351)

¹⁷ 1950年代に加藤が書いた音楽論には、オネゲル《火刑台上のジャンヌ・ダルク》やジョリヴェ《ピアノ協奏曲》を取り上げたものがある。

¹⁸ (滋 1990, 265)

¹⁹ (無署名 2000, 67)

この中で、講演メモが残っているのが「シンフォニーオーケストラフォーラム'90」での講演である。これに関連する史料として、開催日と開催された場所、「Symphony Orchestra Forum」と書かれた断片的なメモと、同じく開催日と開催された場所、「日本社会と文化、殊に Orchestra」と題された文章が所蔵されている。なお、文章に書かれた日付は、フォーラムが開催された「11」ではなく「10」と書かれているが、場所が同じであること、メモと文章の内容には重なる部分が多いため、二つの史料は関係あるものと判断する。「日本社会と文化、殊に Orchestra」の内容は、芸術文化への助成の在り方について、オーケストラを例に説明したものである。加藤はこれを、「文化的創造と受容は別の現象」「文化的創造と保存の問題」「文化的水準をあげることと普及の問題」「創り手の自由の問題」の4つに分けて説明し、オーケストラだけでなく、同じく、芝居やバレエなどの大勢の人数を要し、資金のかかる文化創造を行う団体が連帯して運動をすすめることを提言している。

こうした加藤の提言はフォーラムでのアピール文には反映されなかった²⁰が、横との連帯を重視する姿勢は「九条の会」でも共通するものである²¹。

● 日記・手帳

・日記

加藤が残した日記は、第一高等学校、東京帝国大学に在学していた時期のもの、戦後直後のものを中心として残っている。この中では、戦前、戦後直後に加藤が変化する社会に対し、何を思ったのかが綴られている。これらは、デジタルアーカイヴで公開されているほか、特に戦前の日記は『加藤周一青春ノート—1937-1942』として、抜粋、活字化されている。

この中での「音楽」に関する記述は、特に西洋音楽を中心とする。戦前に加藤が書いた日記には、ショパンに関する評論の構想、演奏会での聴衆や演奏者の様子などが綴られている。戦後になると、妻・綾子の弾くピアノの印象といった身近な人々の演奏や、海外で

²⁰ 「シンフォニーオーケストラフォーラム'90」では以下3つのアピールを採択した（滋1990, 265）。

- ① 公的助成、民間助成ともに飛躍的に増大させるため、芸術文化振興基金の創設および将来にわたる基金の増額、そして民間助成を促進する寄付金に対する税制の抜本的見直し改正を行うこと。
- ② 公的助成の運用にあたっては、専任芸術家を多数擁して創造的活動を行わなければならない集团的舞台芸術団体を重点とし、かつとくにシンフォニー・オーケストラに対しては恒常的な楽団運営の基盤を直接援助する助成とすること。
- ③ 日本の現代芸術を育て、世界の芸術創造活動に積極的に参与し、国際的な責務を果たし得るような多面的な施策を行うこと。

²¹ (加藤2006, 7)

シェーンベルクを聴いた際の印象が書かれている。

・手帳

1950年代以降に加藤が書いた手帳には、予定や執筆した原稿、当時交友のあった人物の連絡先が書かれている。例えば、1954年の手帳(T-01)には、連絡先の中に別宮貞雄と音楽評論家の遠山一行(1922 - 2014)の名前が載っている。加藤と別宮との関係は後述するが、加藤と遠山とは、両者とも同時期にフランスに留学しており、遠山が対談した際に、司会として加藤が加わっていること²²から、同じ留学生仲間として面識を持ったことが考えられる。しかし、遠山の連絡先が書かれたのは、この時期だけであるため、つながりは一時的なものであったことが考えられる。

翌年の1955年には、桐朋学園音楽科の連絡先が書かれ、予定表にも桐朋学園の名前が書かれている。1959年の手帳まで桐朋学園の名前は確認できるため、ブリティッシュ・コロロンビア大学に客員教授として出講する直前の1959年まで、桐朋学園音楽科と何らかの関わりがあったことが考えられる。

また、執筆した記事の一覧が手帳やノートに書かれている。その中には、『加藤周一自選集』10巻の「著作目録」に掲載されていない記事も含まれている。「音楽」関連のものに限れば、以下のものがある。

(凡例)

【資料名】

・掲載紙

タイトル

【N12】〔フランス留学中の著作目録〕

・『西日本新聞』

音楽会でのエピソード

フランス映画対談(木下・黛)

廿世紀音楽対談(遠山・砂原)²³

²² 加藤が司会を務めている遠山一行の対談は2つ確認できる。

遠山一行、三島由紀夫、加藤周一(司会)「南北米 フランスの印象」西日本新聞』1952年3月29日2面

砂原美智子、遠山一行、加藤周一(司会)「すぐれているシュトラウス パリでひらいた鼎談」『西日本新聞』1952年6月16日2面

²³ 砂原美智子、遠山一行、加藤周一(司会)「すぐれているシュトラウス パリでひらいた鼎談」『西日本新聞』1952年6月16日2面か

砂原美智子のお蝶夫人 1/VII

“薔薇の騎士” (3) 27/VII

・共同通信、産経

展らん会の絵

×トゥランガリラ・サンフォニー 5 11/III

×ニーベルンゲンの指輪 5 29/VII

※“ポーギーとベス” (2) 25/X

【1955】

読書新聞 (3) オペラ書評 19/XII²⁴

【1956】

・N.N. (『西日本新聞』)

ヴァーグナーの偉大と NHK の愚鈍

ヴィーンの笛吹き

・音楽芸術 (渡辺) 30/I

しかしこれらの中には、掲載が見送られた原稿が含まれている可能性があるため、実際にこれらの原稿が掲載されたのかを確認する必要がある。

1.2 蔵書

加藤周一の蔵書は、調査の際にいくつかの点において注意が必要となる。まず、パートナーだったヒルダ・シュタインメッツと矢島翠の蔵書も混じっていること、次に、著者あるいは出版社から献本されたが読まずに保管された可能性のある本が存在することである。そのため、蔵書の中から、加藤に贈られた、あるいは加藤が購入した本を精査する必要がある。

そのため、本稿は加藤による書き込み、あるいは著者によるサインが入った本の調査を、それらが所蔵されている準貴重書庫にて実施した。加藤が持っていた書き込みあるいはサインが入った「音楽」関連図書は本稿最後のページにて提示する。

ほとんどが著者から献本されたサイン本であるが、時期ごとに蔵書の傾向が異なる。

フランス留学の前には、加藤が西洋音楽に関する知識を得るために購入したことが考えられる大田黒元雄の翻訳による入門書、ショパンの生涯に関する伝記が収められている。特にセシル・グレイ著、大田黒訳による『音楽芸術史』の見開きページには、「A Survey of Contemporary Music」と書かれた、リヒャルト・シュトラウスなどの西洋の作曲家をまとめた書き込みが残されている。また、箕作秋吉などの、戦後直後に加藤とともに音楽に

²⁴ 加藤周一「〈書評〉マニユエル著『オペラ』」『日本読書新聞』1956年1月9日か

関する著作に関わった²⁵作曲家からのサイン本も残されている。

フランス留学後は、吉田秀和（1913-2012）、別宮貞雄などの親交のあった音楽家からのサイン本が多く残されている。この中でも特に多いのが、吉田秀和からの献本である。吉田秀和とのつながりがいつ始まったのかについては、詳細は分からない。しかし、1950年12月に出版された『世界の音楽』のサイン本があり、1951年3月8日『夕刊西日本新聞』に掲載された「ウの目タカ目 音楽批評家」で同書が取り上げられていること²⁶から、早くても1950年代には交友があったことが考えられる。その後、座談会や書評、書簡を通じた交友は続いた。

フランス留学後の書き込みのある図書は、本の中に書き込むのではなく、下線部のみを引くものが中心となる。特に本稿が注目するのが、日本音楽に関する本への書き込みである。例えば『日本の美学』1巻4号掲載の吉川英史、神正、河竹登志夫による座談会「日本音楽をめぐって」には、音色のヨーロッパの音楽との比較、「間」の説明の部分に下線部が引かれている。また、武満徹『遠い呼び声の彼方へ』では、琵琶の「さわり」についての説明、「旋律より音色を大事に考え」る日本音楽の独自性、尺八音楽に関する説明の部分に下線が引かれている。これらの本を購入した時期は不明だが、特に『遠い呼び声の彼方へ』の下線部分は、『日本文化における時間と空間』の引用部分と重なる²⁷ため、執筆の際に参照していたことが分かる。この「日本文化」における時間と空間という主題は、それ以前にも講演で語っている²⁸ように、『日本文化における時間と空間』を刊行する以前から加藤は関心を持っていた。この講演では日本音楽については、部分がそれぞれの瞬間の中で自己を主張する点を特徴として挙げている²⁹。『日本文化における時間と空間』では武満の文章をもとにこの議論を深化させていることから、加藤が一貫して抱いていた問題意識を論じるに当たり、どのような蔵書を参照し、それによって加藤の主張がどのように変化したのかを明らかにする際に、こうした蔵書は意味を持つだろう。

1.3 書簡

加藤周一に送られた書簡類は、現在整理中であるため、詳細な数は不明だが、現時点（2023年3月現在）では、約4,300通の書簡が確認されている。

その多くは段ボール箱の中に収められ、紐や輪ゴムでまとめられている。

²⁵ 例えば、1949年に平尾貴四男が代表として発行した高等学校向け教科書『音楽の遊び』で、加藤はシューベルトやシューマンの歌曲を翻訳し、箕作は自作曲を掲載している。

²⁶ （二郎 1951, 2）

²⁷ （加藤 2008, 104-105）

²⁸ 加藤周一 1996 「日本文化における時間と空間について」『加藤周一講演集Ⅱ』京都：かがわ出版。

²⁹ （加藤 1997, 82）

また、破損は少なく、木の箱など良質な環境の中で保存されていたことがうかがえる。

図1

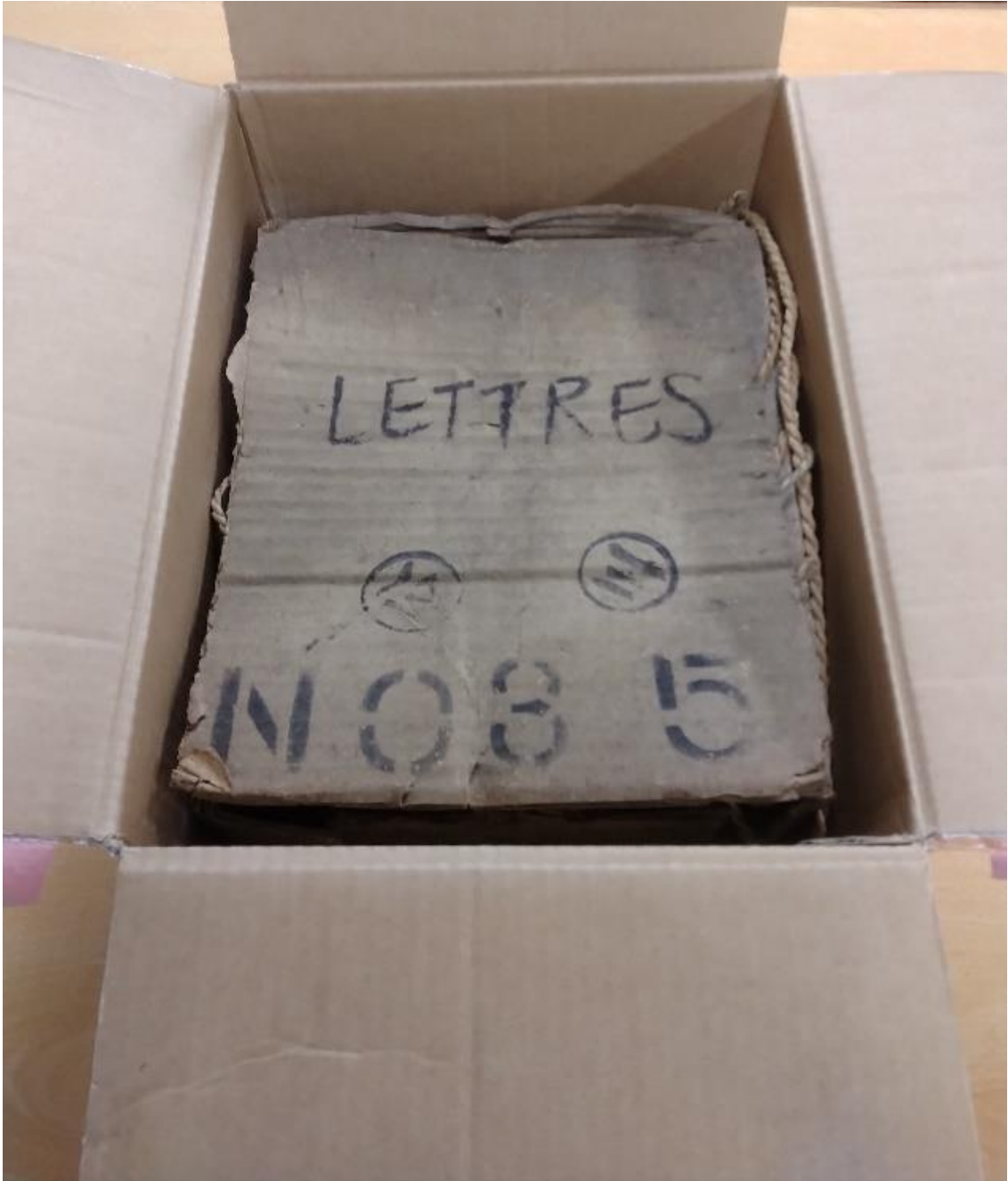


図2



図3



図4



こうした書簡は、加藤の著作が刊行されるまでの出版社と編集者とのやりとり、加藤の人的つながり、そして加藤を介した発信者の人物像をみることができる。なお、こうした書簡を中心とする未公開の史資料を扱う際には、著作権法・個人情報保護・プライバシー権・名誉権といった法的問題がある³⁰。加藤文庫の書簡の中にも、これらの法的問題に当てはまる書簡が数多く含まれる。そのため、これらの点に留意した上で「音楽」関係者からの書簡を紹介する。

「音楽」関係者からの書簡は、主に3つの時期に分けることができる。

まず戦前期である。この時期は、作曲家の長村金二（1906-1947）³¹から送られた書簡が残されている。内容は身辺雑事に関することが中心であるため、長村の音楽に関する見方を知ることは難しいが、軽井沢を中心とした戦前の文化人の交友の一端を見て取ることができる。

次に、敗戦直後の1940年代の書簡である。この時期には、作曲家の柴田南雄（1916-

³⁰（阪本、堤、横島 2020, 16）

³¹ 慶応義塾大学卒業、ワグネル・ソサエティに所属。JOAK、東京中央放送局文芸部員。橋本国彦と諸井三郎に師事。昭和16、17年頃に宝塚歌劇団の嘱託。作品に歌曲「冬の日」（三好達治詩）、「落葉樹」（北原白秋詩）、映画音楽がある（長村 2012, 10-13）。

1996) とピアノ調律師の竹内友三郎 (1905-1981) とのピアノの購入に関する遣り取りが残されている。また、作曲家の平尾貴四男 (1907-1953) と中田喜直 (1923-2000) からの演奏会の招待状が残されている。

そして 1951 年のフランス留学以降、矢代秋雄 (1929-1976) や別宮貞雄 (1922-2012) といった共に留学した音楽家、石井眞木 (1936-2003) や大塚敬子 (1937-) といった何らかの形で学生時代に加藤と知り合った音楽家³²、そして親交のあった吉田秀和 (1913-2012)、石井好子 (1922-2010) などの書簡が残されている。

この中でも、特に書簡数が多いのは、別宮貞雄と吉田秀和のものである。

2 利用の展望——別宮貞雄宛書簡を例に

2.1 加藤と別宮との関係について

本節は、加藤周一文庫に収められた「音楽」関連の史資料が、音楽史研究においてどのように活かすことができるのかを、加藤が最も多く書簡を受け取った音楽家である別宮貞雄を例に提示する。

別宮貞雄は、日本の作曲家である。洋楽趣味の父親の影響で幼いころから音楽を好み、第一高等学校在学中にヴァイオリンを学び男声合唱に親しむ。東京帝国大学在学中に池内友次郎に作曲を学び、終戦後音楽コンクールに入賞。1951年に黛敏郎と矢代秋雄とともに渡仏し、パリ国立音楽院でダリウス・ミヨーとジャン・リヴィエから作曲、オリヴィエ・メシアンから楽曲分析、シモーヌ・プレ・コーサードからフーガと対位法を学ぶ。帰国後、桐朋学園大学と中央大学で教鞭をとり、日本現代音楽協会委員長を務めた。1956と1971年に尾高賞を受賞した³³。

別宮と加藤とのつながりは、1951年のフランス留学前と考えられる。別宮の回想によれば、加藤との出会いは1950年夏より前に、吉田秀和と一緒に行った中で話を交わしたのが最初だとしている³⁴。その後、別宮は加藤が発表した詩の中から「雨と風」と「さくら横ちょう」を選び、作曲したものを《二つのロンデル》として発表した。加藤の詩を選んだ経緯について別宮は、歌曲を作曲する態度と関連させながら、以下のように説明している。

私は歌曲作曲にあたって、詩の内容表現に専念する余りレシタティーヴ風なものに走ることは、ドビュッシーの如き例学的才能がない限り危険だと考え、声とピアノの2重奏として、できるだけ輪郭のはっきりした旋律で純音楽的にも興味を持続できるも

³² 例えば、桐朋学園短期大学音楽科作曲科を卒業した大塚敬子は、「高校のとき、ひょんなことから知り合った」加藤周一に、オーストリアへの留学を相談している (大塚 2002, 5)。

³³ (細川、片山 2008, 588-589)

³⁴ (別宮 2002, 21)

のを書くよう努めて居ります。

その場合、詩が何等かの形と、リズムの秩序とを持っていることが必要なのですが、日本の現代史にはそのような条件を満足させるものが稀なので、私は何時も困却します。それで加藤氏のこの詩は私にとって貴重なものでした³⁵。

加藤を中心とする「マチネ・ポエティック」は、脚韻などの西洋で行われていた「押韻定型詩」を日本語で試作し、1948年に刊行された『マチネ・ポエティック詩集』を通じて発表し、注目を浴びていた。加藤の「雨と風」と「さくら横ちょう」も例にもれず、七五調とoとuの脚韻といった形式を有している。こうした一定の形式を有していること、個人的なつながりから、別宮は『マチネ・ポエティック詩集』の中から加藤の詩を選んだことが考えられる。この《二つのロンデル》は、1951年8月に放送初演³⁶されて以降、特に〈さくら横ちょう〉は、現在でも演奏会のレパートリーの一つとして演奏されている。

また、別宮は加藤とともに1951年のフランス政府留学生に「エチューディアン・パトローネ」としてフランスに留学したこと³⁷、加藤が1954年のフランス留学時代に書いた手帳に別宮の名前と住所が書かれていること³⁸からも、フランス留学中に親交があったことが考えられる。

フランス留学から帰国後は、ともに座談会に参加する機会があった³⁹が、対談や共著、あるいは互いの作品を書評という形で取り上げるなどの、表面上のつながりは見られない。そのため、加藤と別宮との交友関係については、献本や書簡といったプライベートでのつながりが主となってくる。

2.2 加藤宛別宮貞雄書簡の概要と内容について

別宮貞雄が加藤周一に宛てた書簡は、以下の5つが残っている。

- ① 1956年6月12日
- ② 1959年4月7日
- ③ 1997年8月26日
- ④ 1998年1月12日
- ⑤ 「哀しいお報らせ」(別宮の妻、明子の訃報)

³⁵ (別宮 1956, 237)

³⁶ (別宮 1979, 頁数なし)

³⁷ (別宮 1995, 74)

³⁸ 加藤周一文庫所蔵、資料番号 T01

³⁹ 例えば、『音楽現代』1972年3月号に掲載された座談会「シェーンベルクはバッハか」では、作曲家の入野義朗による司会のもと、作曲家の湯浅譲二と端山貢明、フランス文学者で文芸評論家の中島健蔵とともに、加藤と別宮が参加している。

各書簡の詳細な内容は、史料の部分にて掲載する。

特に本稿が目にするのが、別宮が自身の創作態度と信仰について語っている②と④の書簡である。②の書簡の中で別宮は、加藤の『現代ヨーロッパの精神』での意見に同意しつつも、「ヨーロッパ精神」の背景を「合理主義」「合理主義的ヒューマニズム」に置くことに対して、「自己の精神」が「他者の精神をみとめる」ための要素として「非合理的精神」の存在を指摘している。この点を別宮は、自身にとって「神」が必要な理由であり、そうした性格を有することが彼の芸術の目標であり、延いては芸術は、「自己実現と同時に、自己を他と結びつけて自己と他とをこえるものでなければならない」と自身の芸術観を著している。

こうした、ある特定の矛盾を止揚して新たな芸術を作り出そうとする姿勢は、後の別宮による創作態度にも表れる。例えば、1983年に開催された「現代の音楽展'83」中の、別宮がプロデュースしたコンサート「失われた“うた”を求めてII —新しいヒューマニズム—」で彼は、「ロマン主義」と「単純さ」を矛盾するものとし、それらが結合し、「人間的止揚」をすることによって「新しいヒューマニズム」が生まれるとしている⁴⁰。別宮の場合、「自己の精神」と「他者の精神」とをつなぐものとして「神」に賭けた。

別宮はこの書簡の後に、インタビューの中でカトリックを受洗した理由を語っている。

受洗したのは、〔東京帝国〕大学の文学部に再入学してからですね。別に神秘的体験にもとづくものでなく、パスカルの瞑想録で、神の存在も又その不存在も証明できない、しかしそのどちらかに仮定してそれに賭けて生きる方がいいのではないかという文章をよんで、ある方に賭けようと思ったのですね⁴¹。

別宮は、こうした「神」に対する態度が「科学」に対する態度にもつながることを、同じインタビューの中で語っている。

私は自然科学畑から出発したせい、世界は数理的な秩序に支配されていると信じる傾きがありますね。確かにそれは相当に明かされてきましたね。しかし実は人間にそんなことがわかること自体が一番不思議なのです。それにそんなことを信じながら、自己の存在、自由意志を持った我を信じている。

私にはそれが錯覚だとは思えない。矛盾がありますね。これを納得するためには、神の存在を認めるのが一番よかろう。こういうわけですよ⁴²。

⁴⁰ (紀野 2021, 30)

⁴¹ (別宮 2003, 93)

⁴² (別宮 2003, 93)

こうした別宮のカトリックや「科学」に対する知見が、作品にどのように反映されているのかについては別途検討が必要である。しかし、インタビューなど、公的に発表したものだけでなく、自身の内面や思想を吐露したものとして、加藤周一宛書簡は意味を持つだろう。

おわりに

本稿では、加藤周一文庫所蔵の「音楽」に関する史資料について紹介した。以上の史資料をもとにして、加藤の「音楽」に関する著作との関連性、他の音楽家による書簡の調査など、この史資料を通じた研究については未知数の部分が多い。こうした研究上の課題を解決することにより、加藤周一の「音楽」に関する思想を通して、戦後日本音楽界と同時代の評論界との関係や日本の音楽界がどのような広がりを持っていたのかを明らかにできることが見込まれる。

参考文献

- 粟谷佳司 2018 『限界芸術論と現代文化研究——戦後日本の知識人と大衆文化についての社会学的研究』西東京：ハーベスト社。
- 今井宏昌 2018 「ヴァイマル共和国初期におけるボード・ウーゼの義勇軍経験——エゴ・ドキュメントにもとづく予備的考察」『史淵』155号：81-102.
- 奥波一秀 2015 「丸山眞男における音楽と啓蒙の問題」『図書』791号：18-24.
- 二宮周平 2016 「図書館長挨拶」『立命館大学図書館 加藤周一文庫』
(<https://www.ritsumeai.ac.jp/lib/b07/020/>、最終確認 2023年3月28日)
- 細川周平, 片山杜秀 (監修) 2008 『日本の作曲家：近現代音楽人名事典』東京：日外アソシエーツ
- 紀野洋孝 2021 「別宮貞雄作曲<智恵子抄>の歌唱に関する研究」(東京藝術大学博士論文)。
- 手塚薫 2011 「伝統的知識の公開と「社会関係資本」としての活用——UKにあるマンロー書簡の社会ネットワーク分析を中心に」『国立歴史民俗博物館研究報告』168号：33-62.
- 阪本尚文、堤裕一郎、横島善子 2020 「未公開エゴ・ドキュメント研究と著作権法——高橋幸八郎関係書簡を事例として」『商学論集』89巻3号：13-24.
- 土合文夫 2012 「丸山文庫楽譜蔵書の調査をひとまず終えて」『東京女子大学比較文化研究所附置丸山眞男記念比較思想研究センター報告』7号：66-79.
- 長村邦彦 2012 『長村金二伝 落葉松そして駅馬車』岐阜：長村邦彦
- 長谷川貴彦 2020 「エゴ・ドキュメント研究の射程」長谷川貴彦 (編) 『エゴ・ドキュメントの歴史学』東京：岩波書店
- 松本礼二 2019 『知識人の時代と丸山眞男——比較 20世紀思想史の試み』東京：岩波書店
- 若林幹夫 2005 「距離と反復」渡辺裕、増田聡 (他著) 『クラシック音楽の政治学』東京：青弓社
- 鷲巣力 2018 『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったのか』東京：岩波書店

引用文献

- 大塚敬子 2002 『ウィーンに生きて——ある打楽器奏者の音楽日誌』東京：音楽之友社。
- 加藤周一 1959 『現代ヨーロッパの精神』東京：岩波書店〔2010『現代ヨーロッパの精神』(岩波現代文庫) 東京：岩波書店〕
- 1959 「西欧とは何か」『群像』14巻4号〔「ヨーロッパとは何か」 2009『加藤周一自選集2』東京：岩波書店〕
- 1997 「日本文化における時間と空間について」『加藤周一著作集19』東京：平凡社
- 1998 「最後の日」『群像』53巻3号〔鷲巣力 (編) 2019『称えることば・悼むことば』東京：西田書店。〕
- 2006 「会は上り坂、勢いに乗りましょう」九条の会 (編) 『九条の会 全国交流

集会報告集』東京：九条の会

—— 2008 『日本文化における時間と空間』東京：岩波書店

滋 1990 「スクランブルショット」『音楽の友』48巻4号: 264-270.

中村真一郎 1982 「鍋島さんの音楽」『鍋島元子チェンバロリサイタル—ラテンとゲルマンの世界』東京：スズキ・アート・エージェンシー

二郎（加藤周一）1951 「ウの目タカの目 音楽批評家」『夕刊西日本新聞』1951年3月8日: 2.

パスカル（著）、塩川徹也（訳）2015 『パンセ（中）』（岩波文庫）岩波書店.

別宮貞雄 1956 「二つのロンドル」堀内敬三（編）『世界大音楽全集 第24巻（声楽篇 日本歌曲集 第2）』東京：音楽之友社.

—— 1979 『別宮貞雄歌曲集 増補』東京：音楽之友社.

—— 1995 『音楽に魅せられて——作曲生活40年』東京：音楽之友社.

—— 2002 「中村真一郎さんと私」『同時代（第三次）』13号: 21-23.

—— 2003 「現音名誉会員インタビュー」『New Composer』4号: 88-93.

丸山眞男 1998 『自己内対話——3冊のノートから』東京：みすず書房.

〔無署名〕2000 「阿部桂子ピアノ・リサイタル」『音楽現代』30巻11号: 67.

Penrose, Roger. 1989. *The emperor's new mind*. New York: Oxford University Press. 〔林一（訳）1994 『皇帝の新しい心——コンピュータ・心・物理法則』東京：みすず書房〕

Popper, Karl Raimund and Eccles, John C. 1977. *The self and its brain*. New York: Springer International. 〔西脇与作（訳）1986 『自我と脳 下』東京：思索社〕

謝辞

本稿にて引用した別宮貞雄の書簡は、野口剛夫氏、立命館大学図書館から公開許可を得た。ここに感謝申し上げる。

表 加藤周一文庫所蔵、書き込み・サイン入り「音楽」関連図書

| 和書 | | | | |
|----------------|---------------------------------|--------|---------|--------------|
| 書名 | 著者 | 出版社 | 出版年 | 備考 |
| 通俗西洋音楽講話 | 田辺尚雄 | 岩波書店 | 1915.11 | 書き込み |
| 音楽芸術史 | Cecil Gray 大田黒元雄 翻訳 | 第一書房 | 1930.4 | 書き込み |
| 西洋音楽史 | Paul Bekker 河上徹太郎 翻訳 | 創元社 | 1941.3 | 書き込み |
| 音楽の時 | 箕作秋吉 | 村松書店 | 1948.9 | サイン本 |
| ベートーヴェン | 諸井三郎 | 文体社 | 1948.9 | サイン本 |
| 現代音楽と日本の作曲家 | Eta Harich-Schneider 吉田秀和 翻訳 | 創元社 | 1950.7 | 書き込み |
| 世界の音楽 | 吉田秀和 | 實業之日本社 | 1950.12 | サイン本 書き込み |
| ドン・ジョヴァンニ | 河上徹太郎 | 細川書店 | 1951.8 | サイン本 |
| 音楽の形式 | André Hodeir 吉田秀和 翻訳 | 白水社 | 1952.1 | サイン本 |
| 主題と変奏：吉田秀和評論集 | 吉田秀和 | 創元社 | 1953.11 | サイン本 書き込み |
| 音楽の鑑賞：音楽とともに | 吉田秀和 | 河出書房 | 1953.7 | 古書 |
| 青春の歌曲集 | 吉田秀和 | 河出書房 | 1954.8 | 古書 |
| 音楽のたのしみ IV オペラ | Roland-Manuel 吉田秀和 翻訳 | 白水社 | 1955.1 | サイン本 |

| | | | | |
|----------------|--------------------------------------|--------|-------------------|------|
| 若き日の音楽 | 吉田秀和 | 河出書房 | 1956.1 | 古書 |
| 音楽家の自画像 | Darius Milhaud 別宮貞雄 翻訳 | 東京創元社 | 1957.3 | 書き込み |
| 音楽紀行 | 吉田秀和 | 新潮社 | 1957.4 | サイン本 |
| 音楽と音楽家 | Robert Schumann 吉田秀和 翻訳 | 岩波書店 | 1958.7 | サイン本 |
| 西洋音楽史 | Hans Mersmann 吉田秀和 翻訳 | みすず書房 | 1959.6- 1960.5 | サイン本 |
| 現代音楽の創造者たち | Hans Heinz Stuckenschmidt 吉田秀和 翻訳 | 新潮社 | 1959.8 | サイン本 |
| 音楽の意味の発見 | 北沢方邦 | 三一書房 | 1967.2 | サイン本 |
| 現代の演奏 | 吉田秀和 | 新潮社 | 1967.2 | サイン本 |
| 音楽の歴史 | Bernard Champigneulle 吉田秀和 翻訳 | 白水社 | 1969.12 | サイン本 |
| わたしは作曲家である | Arthur Honegger 別宮貞雄 翻訳 | 音楽之友社 | 1970.2 | サイン本 |
| 音楽に何が問われているか | 北沢方邦 | 田畑書店 | 1971.3 | サイン本 |
| 音楽の不思議 | 別宮貞雄 | 音楽之友社 | 1971.6 | 書き込み |
| 世界の指揮者 | 吉田秀和 | ラジオ技術社 | 1973.4 | サイン本 |
| 私の音楽ノート | 高田博厚 | 音楽之友社 | 1973.6 | サイン本 |
| 主題と変奏 | 吉田秀和 | 白水社 | 1975.2 | サイン本 |
| 現代の演奏 | 吉田秀和 | 白水社 | 1975.3 | サイン本 |
| モーツァルト・ベートーヴェン | 吉田秀和 | 白水社 | 1975.5 | サイン本 |

| | | | | |
|---------------------------|------------------------------------|------------------------------------|---------|------|
| 世界のピアニスト | 吉田秀和 | ラジオ技術社 | 1976.7 | サイン本 |
| 私の好きな曲 | 吉田秀和 | 新潮社 | 1977.3 | サイン本 |
| 日本の耳 | 小倉朗 | 岩波書店 | 1977.5 | サイン本 |
| 音楽展望 | 吉田秀和 | 講談社 | 1978 | サイン本 |
| 守田正義の世界：一音楽家の自伝 | 守田正義 | みすず書房 | 1981.12 | サイン本 |
| イタリアオペラの魅力 | 戸口幸策 | 日本放送出版協会 | 1981.9 | サイン本 |
| なぜモーツァルトを書かないか | 小倉朗 | 小学館 | 1984.5 | 書き込み |
| 日本の美学4 特集 音 | | ぺりかん社 | 1985.3 | 書き込み |
| 西洋の音,日本の耳：近代日本文学と西洋音楽 | 中村洪介 | 春秋社 | 1987.4 | 書き込み |
| 「第九」と日本人 | 鈴木淑弘 | 春秋社 | 1989.11 | 書き込み |
| 遠い呼び声の彼方へ | 武満徹 | 新潮社 | 1992.11 | 書き込み |
| 回想の守田正義 | 黒澤照代 | 黒澤照代 | 1993.6 | サイン本 |
| 夢のあとで：フランス歌曲の珠玉・古澤淑子伝 | 星谷とよみ | 文園社 | 1993.8 | サイン本 |
| 未だかわらず上等舶来：オペラから見た日本文明脆弱論 | 岡田豊 | 福澤英敏 | 1994.6 | サイン本 |
| 子どもの歌を語る：唱歌と童謡 | 山住正己 | 岩波書店 | 1994.9 | サイン本 |
| 打楽器がうまくなる本 | 大塚敬子 | 音楽之友社 | 1997.11 | サイン本 |
| 武満徹対談集：創造の周辺 | 武満徹 | 芸術現代社 | 1997.2 | 挟み込み |
| 鍋島元子：人と業績：還暦記念 | 古楽研究会 Origo et Practica 年譜作成委員会 | 古楽研究会 Origo et Practica 年譜作成委員会 | 1997.6 | 挟み込み |
| バルトーク：民謡を「発見」した辺境の作曲家 | 伊東信宏 | 中央公論社 | 1997.7 | 書き込み |
| 不協和音：管理社会における音楽 | Theodor Adorno 三光長治・高辻知義 翻訳 | 平凡社 | 1998.2 | 書き込み |

| | | | | |
|-----------------------|-------------------------|-------------------------|---------|------|
| 武満徹著作集 | 武満徹 | 新潮社 | 2000 | 書き込み |
| さようなら私の二十世紀 | 石井好子 | 東京新聞出版局 | 2000.1 | サイン本 |
| 鍋島元子追悼録 | 古楽研究会 Origo et Practica | 古楽研究会 Origo et Practica | 2000.11 | サイン本 |
| ウィーンに生きて：ある打楽器奏者の音楽日誌 | 大塚敬子 | 音楽之友社 | 2002.8 | サイン本 |
| 「遙か、ひと筋の途を--」 | 別宮貞雄 | 芸術現代社 | 2003.3 | サイン本 |
| 東京のオペラの森 | 東京のオペラの森実行委員会 | 東京のオペラの森実行委員会 | 2005.3 | 書き込み |
| さよならは云わない | 石井好子 | 暮しの手帖社 | 2005.9 | サイン本 |
| アンドレア・シェニエ | 新国立劇場運営財団営業部 | 新国立劇場運営財団 | 2005.11 | 書き込み |

| 洋書 | | | | |
|---|---------------------|--------------------------------|--------|------|
| 書名 | 著者 | 出版社 | 出版年 | 備考 |
| Frederick Chopin as a man and musician | Frederick Niecks | Novello | [19--] | 書き込み |
| Gespräche über Musik | Wilhelm Furtwängler | Atlantis | 1949 | 書き込み |
| Ernest Ansermet : Une vie en images dessinée par Géa Augsburg commentée par Paul Budry et Romain Goldron, suivie d'un texte original d'Ernest Ansermet Le geste du chef d'orchestre | Budry Paul | Delachaux et Niestlé | 1965 | サイン本 |
| Vivaldi | Roland de Candé | Seuil | 1967 | 書き込み |
| Concise Oxford dictionary of opera | Harold D. Rosenthal | Oxford University Press | 1972 | 書き込み |
| La structure musicale du nô : théâtre traditionnel japonais | 丹波 明 | Klincksieck | 1974 | サイン本 |
| Joan Sutherland : a tribute | Moffatt Oxenbould | Art Gallery of New South Wales | 1989 | サイン本 |
| Wind in the bamboo : aspects of Japanese music | 大学婦人協会 | CWAJ | 1992 | サイン本 |